

---

# 天翔ける星たち

レイター西

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天翔ける星たち

### 【NZコード】

N4271C

### 【作者名】

レイター西

### 【あらすじ】

亜空間発生装置が開発され調査団が行方不明そんな最中知らず軍に入るラーニャの運命は、 、 、

## 第1話

### 第1章

激しい爆発 碎け散る壁 閃光 人の叫び声 敵戦艦に強襲艦が突入  
ここは、亜空間 ミサイルもレーザさえもまともに打てない空間

人類が、亜空間発生装置を開発研究 発見 確認してから3ヶ月

第1陣調査団が投入された

調査は順調に行われたしかし何かを見たとの連絡後 消息は途絶えた。

その後調査団は結論を、だした 亜空間に敵がいるらしい。人類は震撼した。 知的生物など今まで見たことが宇宙ではなかったからである

軍は、急遽この後この宇宙空間に広がる亜空間<sup>エーヴィア</sup>発生装置を戦艦 要塞で取り囲んだ

まだ 、敵が何なのかも知らずに、、、

### 第1章

そのころ、コロニーでは新しい軍の人員を募集していく 最近特に軍は一般の人員を集めるのが多くなっていた。

次の方、ラーニャ・マロンさんですね 宇宙生物研究部門ですね。ここでよろしいですか？

あ、あ はい そこでおねがいします。

ラーニャは小柄な女性だった あまり仕事に興味がなく このあまり出番がなさそうなこの仕事で静かに暮らりそつと思っていた。

ラーニャ ラーニャ 受付が終わったあとラーニャを呼ぶ声が聞こえた。

友達のマールだ。 ラーニャ決まつたかいあたしゃー海兵隊だよ  
ロケットランチャーを撃つてドカドカやるんだ あははー  
マールとは、昔からの友人だつた。 軍に入ったのも彼女のせいだつたのかかもしれない？

後 父親から逃げたかったのが一番だった  
しかし どうしても海兵隊志願の彼女には体力的についていけそうになかった

頼むから私に向かってうたないでね。 後どこかで同じ仕事ができるといいね

おおそうだな あははー マールは言った 就職祝いだ今夜は飲むぞー ガンガンは飲むぞー  
いい男連れてくるからさーー 6時だよおくれんなよ そういう残してその場を別れた

彼女マールは男まさりな性格をもちつつも世話好きな性格でよく今まで助けてくれたことも多かった。

その後 ラーニャは、軍の実務担当者のレクチャーを受け その他もろもろの講習を受けた

それから今日の実務を終え6時 約束の店に着いた。

マールは青くなっていた どうしたのマール? ラーニャは言ったそしてマールが見ていた

空間TVに目を向けた。 そこでは軍の艦隊が多大な攻撃を受け燃えさかるニュースが流れていた

ひどい有様で、軍の最新鋭母艦が砕け散るさまが録画されていた

ごめんラーニャもしかしたら私とんでもないときに軍に入ったのかもしれない

あなた、もしかしたら軍に入ったのは私の影響だと思っていたのでも死ぬわけないし別にいいかなーと けど最近のつわさで話 やばいらしいのだからあんな大々的に採用してたのね。  
おかしなーと思つていたけど 昔から父さんたちも軍人で夢だったの 私は特殊兵科も習つてゐしの知つてゐるでしょ

実はこのときまで 軍はあまり亜空間の出来事を大げさにせず人類の敵がたいしたことがないような情報操作がなされていたのだったしかしこのときだれもがこの敵についてはじめて恐怖の対象としてとらえたときでもあった

## 第2章

それから、数日後 父親と家族の反対を押しのけ ラーニャは軍のトレーニングセンターに来ていた。

普通ならここでトレーニングをするのだろうがほぼ全員第8「ロード」<sup>ロード</sup>亜空間発生装置のそばに送るというのが軍の方針らしい。輸送艦離発着場もすぐだった

そこには、マールの姿もあった

よついたいたマールがそばに来た マ・ルの話では、1500人ほどで輸送艦に適当に乗つていいらしいのよ

3番艦で一緒にどうお嬢さん マールが言つた よろしくお願ひしますわ ラーニャ達は、まるで修学旅行でも行こうかの気持ちでいた輸送艦に乗り宇宙の景色を眺めることそれから3時間後 乗つた後氣ずいたのだがやたらほかの艦と密集して航行しているのであるやたら近いわねマール そう? 何番艦かわからないけど向こうの窓の人見えそう マールは言つたみえないわよー馬鹿じやない?  
そのとき

ものすごい爆発音が聞こえた どよめく乗員 みろ みろ どこからか声が聞こえた うちの後ろの艦攻撃を受けてる なんだありや 怪物か？まるでありやタコか？機械ぽいな。でかいぞ

私からでは見えない ただ爆発音と艦内放送の頭を下げてシートベルトをつけるとの声がこだましていた 今まで味わったことない急加速、急旋回、急制動、何かから逃げてるしかわからない。

船体がきしみ何かが当たる音 時々の悲鳴 たすけてー初めての死の恐怖

マールが手を握ってくれこいついた助かるわよ 私運いいから

それからどのくらい経つたのだろう また爆発音が聞こえた そしてだれかが味方が来たぞーーとの声助かったの？ 顔を上げた艦内アナウンスが聞こえた 危険は去りました 今しばらく落ち着いてください 見方の駆逐艦が敵と交戦中 もう少しで第8「ロー」です

助かったという安堵感 何で教えてないのという不安感 そんな気持ちで第8「ロー」に着いた

### 第3章

コロニーについてわかつたが、1番艦、2番艦、12番艦は、撃破されていた

戦闘航行中に当たるような音は、1、2番艦の残骸だった マールは言った 私飛んでく死体を見た 最悪だつたわ でもこれからよく見そうだわ

あなたは、宇宙生物研究部門だからもつとすこいの見そうだわね

ええっ そんなー 私は言つた こんなときの子はとつよくなつた。

じゃわたしは部屋にいくわ またねマール マールと別れた。

初めての一人部屋だが いろいろありすぎて疲れて眠つてしまつた

## 次の日 宇宙生物研究部門

はじめまして 私、ラーニャ・マロンとこりますよろしくおねがいします。

新人さん、挨拶はいいからこれをもつて2番駆逐艦に行つてくれそこで挨拶してくれと紙と鞄をもらつた おお、重いわね私は言われたとうり2番駆逐艦に向かつた

そこには、腐れ縁 マールがいた 君たちか今度うちの強襲艦の乗組員は、私が一番艦艦長のアーノルドだ。艦長だが 君たちに浣腸はしない がんばつてくれたまえ

さらにアーノルド艦長は言つた

なんと君たちの運がいい事に一番艦は新造戦艦である。作られて18年になる。どこがじや マールが言つた

強襲艦は、もらいものだ 一番艦の ええっ マールが言つた ジやアーノルド艦長ひとつ質問があります一番艦はどうしているのですか？ アーノルドは言つた一番艦は今ない 情報部の無理な作戦で爆沈した。今度は俺たちかもしれん

まあ 不安はあるかもしれんがせいぜい逃げぬことだ よろしく  
よろしく

ああ ここに集まつたきみたちは、これからチームだうちの艦から二人ほど紹介しよう 歴戦の勇者 ガル軍曹だ  
接近戦は 彼に任せろ 彼がやられたら逃げろということだ  
(ガルだよろしく)

ソナーのマイ 作戦の通信もかねる (まいでーすよろしく)

艦長 強襲艦の操舵手は誰ですか？ マールが言った  
アーノルド艦長は言った なに言ってんだお前しかいねー  
じゃお前たちも紹介しろ

新人操舵手になりました マール・アシュリーです。よろしく  
( 艦長がにらむ )

マール・アシュリーです。よろしく

ジョン・ベリー 新人です ええ 砲撃手です 後たぶん白兵戦も担当です。 よ、よろしく？

最後になりました宇宙生物研究部門の新人ラーニャ・マロンです。

艦長が言った お前は何をする係りかな？  
だいたいな マールにしても ガルにしてもだ 軍の特殊兵科を受けているがおまえさんはちがう 大体強襲艦とは上官5人で1チームだが、乗組員は35人くらいだ

おまえさんは、昆虫採集 兼 白兵戦妨害担当だ

こ、こ 昆虫採集？ラーニャが言った 敵の死体でも とるんですか  
さつしがいいなー そうだ 艦長が言った ジゃあとは もう一度紹介 ラーニャ・マロンです よろしく よろしく  
あまりの雰囲気にマールが笑った 艦長が言った 後白兵戦は主に  
マール先頭に行くこと 以上

ええー マールがうなだれた

場所を変えガル主体で強襲艦の前でブリーフィング

スマンが強襲艦リーダーだがラーニャでたのむ ガルが言った本当はこういいうのは経験者がするのだが。俺の仲間は戦死したしおれはしたことがないし難しい話や会議はみなわからんからよろしく

（ええーつラーニャ）

あと おののほかの乗組員に名前と所属を言つておくようだから部下をつける1人6人 全部で30人だ それからこれが一番大事だが ・・・・ 艦の名前だ どうする？

ガルの意見 おれは、ドクロ ドクロでどうだ？ （みんなでいやあーよ）

ジョンの意見 自分は、ジャステイス （みんなでかたいなーなんかいやだな）

マイの意見 わーたーしは エルメス （なんかどつかで聞いたガン ムみたいでやだなひそひそ）

ラーニャ意見 マール（本人目の前じやいやだな 自爆しそうヒソヒソ）

マールなんだとー（怒）

マ・ル意見 フェ フェアリー（は はずかしいヒソヒソ）

マールなんだとー（怒）

ガル じゃドクロで決まりな （一同イヤーー）

じゃフニアリーでラーニャが言った（もうここやあやめ一回）

ガル じゃドクロヒトフニアリーな（ドクロ要らん一回）

そんなさなか艦長は、ほかの艦長と深刻な話をしていた アーノルド艦長聞いてくれ

やつり 宇宙戦では駆逐艦五隻相手に一隻で、互角と来てやがる  
エーヴァを即刻破壊するべきだそうすればやつらはこれなくなる  
だが情報部の話では一度こちから存在を知った以上また来ると見て  
いる どうしたらいいんだ

アーノルドは言ったとりあえず うちらが宇宙間探査に行へりしき  
それまで待つてくれ

あまり期待してもらつても困るが よろしくたのむよ

2ヶ月ぐらいをめどにこつてくる こんなこと話してもじょうがな  
いだろいかにやわからん  
もしかしたら敵本拠地がわかるかもしれん 多分 殺されるが ま  
あそんなところだ

通信切る また酒でもおひつもひつよこつか じゃーな

1時間後 アーノルド艦長は、頭をかきながら 明日ひとよんま  
るまる時に亜空間に行くよん全強襲艦リーダーに物資運搬しようと  
う通信用イヤーピアスに連絡してきた  
それからわしゃ寝ると。

次の日 13:00 つこに、亜空間に旅たつときが来た 艦隊編  
成2番艦のみと並つともない編成だつた  
軍情報部、軍本部は、二番艦が帰つてこないことを予想していた  
しかし そのことを 一番艦では、アーノルドしか知られていな  
いのであつた

ひとよんまるまる時 いくぞ ついに突入が開始された。

エーヴァはとんでもなくでかく見るものすべて人間の偉大さを感じさせるものだつた

その後一番鑑は、亜空間発生装置エーヴァの中心に待機 その後渦巻く水のような中に入つていくのだつた。

一瞬目が見えなくなりますので目をつぶり携帯用電磁ベルトをご使用ください

これといって亜空間は、ただガラスが舞うみたいにきらきらしてい  
て見かけ上は、宇宙空間とあまり変わりがないとこだが 世界が時  
よりゆがむような目の錯覚におちいる場所だつた

## 第5章

三日後、外を眺めるガルにラーニャが言った ところで亜空間って  
宇宙空間とどこか違うのですか？

ガルが言った 基本的には宇宙空間に似ているがどこだか位置が  
ワカラネイ 光が少しなぜか屈折するからそばしか光学武器もろく  
につかえない 戦いは白兵戦が主だ 艦隊戦はできない  
ほら戦艦にヒモついてるだろ あれ ビーグといつてなあれの範囲  
しか動けない あの範囲を拡大するのも俺たちの仕事さ あのヒモ  
は特殊光学纖維でなそこらじゅうにつけて回れるんだ戦闘中は当然  
切るでないとひつかかるからな 簡単な話 犬が縄張りを広げる  
方法に似ている

マーキングだ でもあれを見失つたが最後だ 補給物資もあれで送  
られる 生命線だな

あと すまんが何もわからんのがここさ いろんなことがつけうり  
でわからん いいかなこんなんで  
聞いてるさなかきなり船が揺れた

ついに 警告音がなった 亜空間航行上に敵機動要塞発見 攻撃を受けました 強襲艦クルーは直ちに発艦してください 強襲艦連絡用端末にも強襲艦フェアリーただいま準備中 5分後発進しますとの連絡

かけこんできた ラーニャ、ガル軍曹 デートしてたか おそいぞ マールが怒る

全員乗つたか よーし フエアリー発進 激しい加速音の中気がつくと そこは わが軍の強襲艦であふれていた

こんなにいたのね ラーニャが言った

ソナー・マイが通信を受けた 敵大型艦発進 どうやら逃げるらしい

全 強襲艦 突撃、

白兵戦用意とのこと いきなりの白兵戦未知との戦いが切つて落とされた

そこには、わが部隊が巨大なパンに爪楊枝を立てるように飛び込んで行つた。

敵艦は超大型、要塞から離脱 抵抗もそんなになさそうだった  
ガルが言つた おーし俺らも刺さるぞ 前面電磁隔壁用意 突撃開始 すると以外に吸いこまれるよう敵艦に食い込んだ  
科学の勝利だ突つ込むぞ。すさまじい銃声音 奇怪な声 そこにま  
るで くらげみたいに透きとうる人の様なものが銃らしきものを撃  
つてきた。ガルはすばやくその敵に銃を撃ち込んだ いまだつーと  
のかけ声の中

わたしたちは、とにかくこの突撃艦の入り口を確保するのだった

自動機銃セットよし

突入煙幕良しゴーグル良し 突入10分後 激戦の最中 通信で敵

戦艦 艦橋を破壊したこと

ガル（ここは、なにもなかつた少しづつ下がるぞ）

撤収命令が下された あれつラーーニャは、大きな箱を見つけた そのなかには 透明な肌の少女がうずくまっていた 後方にいたラーニャはとっさに移動端末で仲間のゴーグルにアクセス 味方の位置を確認、さらに煙幕で視認性をほぼゼロにして強襲艦の格納庫に少女を隠してしまった

隠し終えたころマールがラーニャのそばにきた 心配したわよ どこ行つてたの？ マールが駆けつけた 煙幕たき過ぎ あんたの部下もパニックだつたわ 何考えているの 後 死体拾つた？ 一体強襲艦の近くにあつたから 部下に運ばせなさい。

それから 20分経つただろうか 一番艦にもどつてきた マールにも誰にも少女のことは言わずに



## 第6章

あれから ブリーフィングが終わり2時間後、強襲艦格納庫に急ぐラ・ニヤの姿があった

ええっと わたしの暗証番号確か1234？ あ あいた そこには静かにねむる少女の姿があつた たしかに透けているようだけど 透けてはいないわ 光が屈折している？

きれーい 肌触りは、赤ちゃんみたい まさかこれで人を食べるとか変身するとかなさそう

わたしは、その子を担架に乗せシーツをかけ と出ようとしたと マールが銃を持つて立っていた。 あんたその死体どうする気？ しかも さつき拾つたと思われる死体はもつと大きかつたわと シーツをめくつた な なにこれは あんた自分がなにやってるかわかつているの？ 言葉を失う2人 しかし数秒後

かつかわいい マールの意外な反応にラニヤは驚いた あまり可愛いといわないマールが可愛いといったので

いまだ いま説得するしかない 殺すのマールこんな天使を 親友の私を艦長言いつけるのといつたらすぐ肩を落として殺したくないんでしょ そして マールは言った わかつたわ誰にも言わないでも危険かもしれないからとりあえず隔離して

あとわかるわよねー見つかつたら軍法会議行きだわ

マール先導の中自分の部屋の研究室に少女をいた そんな時少女が起きた 少女はあわててシーツをかぶり 目をすこしだけだしてこっちを見るのだった。

しかし、マールが頭をなでると震えていた少女がすこしづつ落ち着いてきた

少女は、なにやらしゃべるが、意味がわからない。

こんなときはやつぱ食いいもんだなとりあえずいろいろ持つてきてやる マールが岡かけかけた

そのとき 少女は、わたしのへやの飲みかけの牛乳を指差すのだった

すこしだけやつてみるよ 出かけかけたマールが言った 飲んでるが 大丈夫かなー？

でも少し少女は首をかしげるのだった。なんか似た飲み物があるんだラーニャは、言った

マールはそれからすぐ強襲艦の整備に向かった。

わたしは、できる限りの会話を試みた 少女が身振り手振りで言つには、お父さん、お母さんは、一緒にいなかつたみたいだ。じやどうしてあそこに それは、わからなかつた

## 第7章

また 3日後 警報が鳴つた 敵戦闘艦発見、ただちに強襲艦持ち場についてくださいなお発進はしません 発進はしません。強襲艦移動後、ガルは 怒つていた一体何が起こつてんだよわからねいよ

揺れる船体時々の爆発 それから 1時間ほど経つてからだったえー艦長アーノルドだ 先ほどの戦闘で我々は十数隻の戦艦から逃げ切つた しかしその代償にビ・グ(ヒモ)を失つた 今からビーグをここから引く ほかに手段がないのだ じゃーそういうことで通信終わる

ここから 近くの天体からビーグを引くのはただまたここに戻らないだけにすぎない

あつさりとした話だつたが大変な内容だつた 家に帰る手段がなくなり補給が出きないこと

クルーには、絶望的な空気が流れていた

警報が解除され交代で自分の部屋に帰ったときラーニャは研究室で寝転ぶ少女を見た。

この短時間で少女はいろいろ意思の伝え方を覚えた。  
少女はいきなり走り込みラーニャに抱きついた。

さみしかつた？ ラーニャは問いかけた 首をかしげる少女  
ラーニャは、おもつた わからんとき首をかしげるのは全宇宙共通？  
実はビーグが切れたことでよいことがひとつあった それは、ラーニャの研究資料を送らなくてよく ラーニャが暇になつて少女と遊べる機会が増えたことだった

よーし 今度はこれよ 空間TVの検索サイトに牛を表示 少女が  
気持ち悪がる

やつぱこれじやないか？ まさかその乳を飲んでるとは思つまい  
少女がTVに触ったとき虫が、表示された 叫び声を上げる少女  
これもいのいのね？ 一体どんな星かしら？ 機械惑星なんててあるわけないな

機嫌を取り直し微笑む少女にただ ラーニャは 笑みを浮かべていた

## 第九章

全、強襲艦リーダーにお伝えします第2ブロック会議室へ全員集合  
願います

ラーニャは、いそいそと出かけた 会議の内容はこうだった

近くの天体に自動生産工場を作りとりあえずの戦艦のエネルギーを  
確保 ビーグをひくとのことだった

強襲艦メンバーを集めそのときは来た 降下始め すさまじい速さ  
で降下する強襲艦

全員顔をよがめる数十秒後 地面に降下成功した

ほら時間がないぞこんなとき敵に見つかったら置いてかれるぞ 急  
いで分担しての作業に取り掛かった 数時間後、戦艦から通信を受  
けた あー艦長のアーノルドだ

すまん すでに敵見つかった 完全に包囲されてる 今いつに作業をやめないと置いてけぼりになるぞ まあ上がつてもどりなるかわからんが そこだと3日だな

全員撤収、それしかなかつた

戦艦に戻るとそこは異様な緊張感がある空間になつていた 20分後、そんななか艦内放送が流れた

あー艦長だが、現在の状況だがはつきりと包囲されたが敵さん何も言つてこない 攻撃もされない

どうしよう? とのこと そいだから少し動いてみようと思つがどうだつ?

いい加減この艦長にもうんざりしてきた マールが言つた 死ぬ気? 包囲されて撃たれない理由なんてあるの? そういつたときマールは私の顔を見つめた

まさか? マールがラーニャに耳打ちする ミルク少女? まさかーでもほかに理由がなかつた

そろそろネタばれでいいじゃないマールが言つた いきなり殺されないわよ みんな命がかかつてる

しかたなくラーニャは、艦橋に少女を連れて行つた おののく船員ややすけるような肌は妖精の様だつた。

艦長ウイルス及び危険性はありません たぶん敵が撃つてこないのはこの子のおかげかも

艦長は少し悩んだ後 一言言つた あー艦 艦首にカプセルデッキがあるそこでやつらにこの子を見せて様子を見よう ラーニャは、言われた通りカプセルデッキで少女を敵に見える位置に自分と一緒に立たせた

数秒後 何隻居たのかわからない敵が 肉眼でも急速に逃げ出すの

が見えた

迎えに来たのじゃないの？ 王女とか？ 王女とかあー？ リーーヤ  
はつぶやいた

しばらくして 艦橋に戻ると歓声が聞こえた 絶望から希望に変わ  
つたからである

1時間もたたないうちに艦内にこのことが伝わった 少女はもう2  
番艦のアイドルになっていた

### 第3話（前書き）

未知との敵との遭遇の中すこしづつわかりだす少女の秘密

### 第3話

#### 第10章

艦長 逃げる敵軍追う艦長 あはは面白いなぜだかわからないがここまで逃げるかー

よーし元ルートでビーグをさがそつ 敵が逃げてくれるなら ここは博打で戻るしかなからう

それから 一度ほど敵軍に会ったが逃げるだけの敵軍に少女の不思議さが増していた

ジョンが言った

ラーニャさんあ、あのうやつぱあの子と こないだ白兵戦で戦った人たちと明らかに違いますよね。

ラーニャ そう そうなのよあの子 私たちにとても容姿が近いのでもこないだ戦つた人には髪がなかつた耳が大きかつた。目が尖つてた第1研究室にある死体とも似ても似つかない

とてもかわいいのーー

ジョン あとあるんですか?

ラーニャ なにがよ?

ジョン あれですよ

ラーニャ はあ?

ラーニャ まさかそんなこと聞くのあつあるわよ 下の「」と 当然

女の子よ お風呂も入れるわ

ジョン うつほーい飛び跳ねて消えてゆく

ラーニャ しまつたーあいつ口リコンか? 未知でも可愛けりやいいのか? 教えんほうがよかつたか? まじめそุดだからついほんとの事を・・・

それから 数時間後 敵のただ中だったが艦内では今まで感じたことがない異様な空気が流れていた。

それでは発表します 第一位 ミルфиー

ミルфиーに決定しました

ラーニャ 何の騒ぎ? マールが言つた あれ知らなかつた? ミルク少女の名前よミルфиー  
だそうよ よかつたねミルфиーちゃんこれからもよろしくね

騒ぎが収まり私は、艦長に呼ばれた 艦長が いきなりですまないがラーニャ ミルфиーだったかな

君はあの子をどう思うかね? おかげでたすかつたが君はかなり危険なことをしたのだよ

許されることじやない 意見を聞かせてくれ

ラーニャは、言つた すいませんあの時私はあの子を見たときなぜか敵とは思えず助けたいと思つてしまつた それは今でも後悔してません けど あとで敵を見て思つたんです  
ぜんぜん種族が違う あの子が特別なのはわかりますが逃げるように行く

包囲もされない 奪還の兆しさえ見れない どちらかといつとあの

子は恐怖の対象みたいな・・

頭がよいのでもう少しで身振り手振りで話せそうです とても私になついています

まかせてもらえますか？

艦長 任せんといつてもだめだろうが少しでも私たちが生き残れる  
ようにがんばってくれよ

あと ミルфиーの写真をくれ

ラーニャ はあ？（内心あまりの人気の高さに戸惑った）

ラーニャ 部屋に帰るとミルфиーが、オートミールをいじつてた  
もうわかるの？

ミルфиー うなづく

ミルфиー ご は ん？ラーニャは た べ りゅ？ た  
べ る？

ラーニャ 食べる 食べる

ミルфиー わたし ちきゅうじつてる

ラーニャ とつぜんなに？ 地球？ よく知ってるね びっくり

ミルфиー そう私 地球知ってる 私宇宙

ラーニャ 宇宙？ 宇宙人てこと？

ミルфиー 違う 私宇宙 私神様

ミルフィーは、手の中に私たちがよく知ってる銀河系を小さなサイズで出して見せた

ラーニャ キレーリすごい でも 神様だかなんだか知らないけど  
ほかの人に見せちゃだめよ  
そんなことをいいながらもう自分の考える常識が通じないのだと感じた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4271c/>

---

天翔ける星たち

2010年10月22日02時18分発行